

カール・コルシュのカウツキー批判 (上)¹⁾

内 田 博

藤女子短期大学 生活学科

はじめに

本稿では、カール・カウツキーの晩年の大著『唯物史観』(1927)に対する批判の書『唯物史観カール・カウツキーとの対決』(1929)を中心に、カウツキー批判に表現されたカール・コルシュの思想を検討する。

この課題を共有する著作としては、すでにレーチェク・コラフスキーの『マルクス主義の主流』がある。それによれば、カウツキーの『唯物史観』は、マルクス以後の科学の発達と資本主義の発展、労働運動や社会主義運動の展開を踏まえて、マルクスとエンゲルスの唯物史観を実証的に再検討し、その限界を指摘した上で独自の歴史観を提起したものであり、マルクス主義者としてマルクス主義の限界に向き合おうとするカウツキーの知的誠実さを示すものであった。それに対してコルシュの批判は、カウツキーの実証に実証的な反論を加えようとするものではなく、自己のマルクス主義理解に安住して、それとは食い違うカウツキーの議論をマルクス主義的ではないと非難するものにすぎない。しかも、カウツキーの立場を「陰性修正主義」と規定した点では、自己のマルクス主義を正統化する際の共産主義者に特有の手口さえ示している。(Kolakowski, L., *Die Hauptströmungen des Marxismus*, Bd. 3, München 1978, S.347-350.) コラコフスキーにとっては、カウツキーがマルクス主義相対化の境地を示しているのに対して、コルシュは教条的マルクス主義の立場を代表するにすぎない。

コラコフスキーの評価は、カウツキーに関しては内在的であり、カウツキーの意図に即したものである。コルシュに関しては、そのカウツキー批判が実証的ではないという点では正しい。しかし第一に、コラコフスキーが完全に見落としているのは、当時の歴史状況の中でなぜコルシュがカウツキーを批判しなければならなかったのか、という問題である。

ハラルト・コートのカウツキー伝によれば、カウツキーの『唯物史観』は、本人の強い自信にも関わらず、ほとんど反響を呼ばなかった。社会民主党の側からは、アルフレート・ブラウンターが好意的に書評し、アレクサンダー・シフリンが部分的な批判を加えた他には、『唯物史観』に対する反応はほとんどなかった。共産党の側からも、オイゲン・バシユカニスらがいくつかの罵声を浴びせたただけであった。(Koth, H., *Meine Zeit wird wieder kommen..... Das Leben des Karl Kautsky*, Berlin 1993, S.218.) コラコフスキーが指摘しているように、

『唯物史観』におけるカウツキーが、マルクスとエンゲルスのマルクス主義の限界を明らかにし、それを越える自前の思想を展開しようとしたのだとすれば、当時の社会民主党も共産党も、カウツキーのこの問題意識を受け止めようとはしなかったのである。そのなかで例外的に、130ページほどの長大な書評を書いたのがコルシュである。ユルゲン・ザイフェルトも指摘しているように、当時のコルシュは、『マルクス主義と哲学』(1923)で要求したマルクス主義の『再建』から、1930年には開始されるマルクス主義との批判的対決に向かう『過渡期』にいた。(Seifert, J., *Einleitende Anmerkungen zu: Karl Korsch, Die materialistische Geschichtsauffassung und andere Schriften*, Frankfurt am Main/Köln 1971, S. III.) コルシュ自身が、マルクス主義の再検討という方向に向かおうとしていたからこそ、ほとんど無視されたに等しいカウツキーの『唯物史観』に、長い時間をかけて取り組むことになったのである。(この事情は、現代でも変わらず、カウツキーの『唯物史観』が検討の対象とされることは、伝記的なカウツキー研究を除けばまれである。)

したがって第二に、コルシュの批判に典型的な教条主義的マルクス主義を見ようとする点で、コラコフスキーの評価は誤っている。『対決』におけるコルシュは、たしかに敵を論破しようとする際の党派的な誹謗中傷用語を用いているが、たんにカウツキーがマルクスとは違うと批判しているのではない。後に明らかにするように、コルシュは、『唯物史観』におけるカウツキーの思想がカウツキー自身のものであることを認めたくえで、カウツキーがそれを展開する際にマルクスの正統性信仰をなお克服しえていない点を、カウツキーの思想がマルクスよりも後退している点を、批判しているのである。

こうして、『唯物史観』にマルクス主義相対化を、『対決』にマルクス主義擁護を見ろというコラコフスキーの評価は、当事者の意図に沿ったものとはいえない。カウツキーとコルシュの双方に内在すれば、双方の著作とも、マルクス主義の相対化を意図したものとして読むべきである。コルシュの『対決』は、相対化の方向と内容に関してカウツキーを批判したのとして読むべきである。

本稿では、このような視角から『対決』におけるコルシュの思想を検討する。

なお、印刷上の制約から脚注は判読不能になるおそれがあるので、引用註・参照註は本文中に簡略化して表示すること

1) HIROSHI UCHIDA: Die kritische Auseinandersetzung mit Karl Kautsky bei Karl Korsch.

にする。カウツキー『唯物史観』からの引用、および同書に対する参照指示は、第何部第何編という形で示す。

第1章 『唯物史観』の構成と内容

第1節 『唯物史観』の構成

『唯物史観』は、カウツキーの理解する唯物史観の全体像を、当時の様々な思潮と対決しながら示そうとしたものであり、序文、2巻55部27編220章の本文、3編の付録によって構成されている。(そのうち第1巻は、戦前に佐多忠隆によって邦訳され、日本評論社より1931年から1932年にかけて出版されている。)

その「序文」によれば、カウツキーの構想する唯物史観とは、自然と社会における事象の統一性を承認し、それを基礎として、世界の普遍的発展の中に社会の特殊な発展を示そうとするものである。具体的にいえば、人類を含む生物有機体の発展史と発展法則を示した上で、それらとの共通性と差異性を踏まえて社会と国家の発展史・発展法則を示そうとするものである。生物史と人類史を貫く大発展理論として唯物史観が描かれることになる。それは、カウツキー自身の意図では、マルクスの唯物史観を人類史に拡張したエンゲルスを継承しつつ乗り越えることによって、社会主義の可能性をより広く深い基盤のもとに捉えようとするものであった。実際に、カウツキーはこう述べている。

「今日、われわれマルクス主義者が唯物史観に関して果たすべき課題は、対象領域の拡大である。マルクスとエンゲルスは、唯物史観を階級社会と階級国家の歴史理論として作り上げた。かれらは晩年になって初めて、……国家以前の無階級社会を自分たちの歴史観のなかに引き入れようとした。『家族の起源』に関するエンゲルスの小冊子こそ、われわれの師が残してくれた唯物史観を拡張する道を示してくれる遺産であった。私は、この道をここで探求しようとして、唯物史観の領域を生物学に関わるところまで拡張したのである。」(第4部第9編)

カウツキーは、こうした基本構想に基づいて、「第1部 精神と世界」では、まず、マルクスの唯物論を再検討することによって、そこから科学方法論を引き出し、ついで、その方法を生物史と人類史に適用することによって得られた発展法則の概略を、弁証法的な法則として説明している。「第2部 人間性」では生物有機体の種としての発展、人類の自然史的発展、生物としての人類を含む自然界における弁証法的発展の基本的構制について論じている。「第3部 人間社会」では、自然史的発展とは区別される人間社会の発展史に議論を移し、発展の動力としての技術と経済について論じている。「第4部 階級と国家」では、人間社会の発展史一般から区別されるものとしての国家誕生以後の歴史を扱い、資本主義以前の国家と資本主義的産業国家の相違、資本主義国家から社会主義への移行の可能性について論じている。さらに第4部の最終編では、マルクスの唯物史観の限界を示すかたちで自分の唯物史観の特徴をまとめており、この部分が『唯物史観』の実質的な結論となっている。最後の「第5部 歴史の意味」では、カウツキーの唯物史観による歴史記述の特徴をまとめている。しかしそこで議論は、唯物史観史学が当時のドイツのアカデミックな歴史学よりも科学的であることを示すことに重点

が置かれている。コルシュも『対決』で述べているように、第5部では、唯物史観の内容面での展開はない。

本章では、コルシュのカウツキー批判に立ち入るまえに、カウツキーの主張を整理しておこう。

第2節 唯物論と弁証法

第1項 唯物論

『唯物史観』のカウツキーによれば、「マルクスの唯物論には、形而上学的な唯物論哲学の側面と科学的方法の側面とがある。唯物論哲学としてのマルクスの唯物論の根本は、人間の社会的な存在が人間の意識を決定し、社会的存在の変化のみが人間の意識における変化を引き起こす、というものである。」(第1部第2編)この命題は、二つの点で問題を含むものであった。

第一に、この命題は、人間社会のみを対象としている点で狭いものであった。前節で見たように、カウツキーにとっては、唯物史観は、マルクスが資本主義社会に適用し、エンゲルスがその適用範囲を人類史に拡張したのを受けて、生物有機体の発展史としての自然史にまで拡張されねばならなかった。セルビア語訳のために準備された序文のドイツ語草稿で、カウツキーはこう述べている。

「『唯物史観』は、1927年に刊行されたが、その基本思想は、第一次大戦のはるか以前に、つまり、私が新ラマルク主義を知ったときに、形成されていたものである。この新ラマルク主義が、有機体の生物的發展と人間社会の發展とを同一の原理に還元して捉える可能性を、私に与えてくれたのである。それがすなわち、獲得された、あるいは遺伝された個体の器官が変化した環境に適応する、という原理である。人類の發展は、有機体の普遍的な發展の特殊事例をなすにすぎない。すなわち、人類が他の有機体から区別されるのは、環境によって課された必要に応じるために人工的な器官を創造することができるという点である。さらに人類は、この新しい器官によって、すなわち技術によって、環境そのものも変えるのである。私は、このような見解が、われわれの師であるマルクスとエンゲルスがうち立てた唯物史観を補完し、さらには強化すると考えた。」(G. Haupu/J. Jemnitz/L. van Rossum (Hg.), *Karl Kautsky und die Sozialdemokratie Sudost-Europas. Korrespondenz 1883-1938.*)

唯物論の自然史への拡張という課題設定は、直接には、この引用にあるように、カウツキーの自然主義的な立場から展開されたものである。(したがって、『唯物史観』におけるカウツキーを必ずしも自然主義的ではないとするSteenson, *Karl Kautsky*, p.234-237の評価はカウツキーに内在したものではない。また、そのさいの自然主義をダーウィン主義と等値している点で、カウツキーの自己了解とも異なる。)新ラマルク主義の社会發展への応用というこの立場は、当時としても、すでに古いものであった。しかし資本主義の見方という点で重要なのは、ここがマルクスとエンゲルスの弁証法に対する批判の出発点になったことである。後に述べるように、マルクスとエンゲルスの弁証法的な歴史發展論に代わって、ここから、生物進化をモデルとした發展論が展開されることになる。

第二に、マルクスとエンゲルスの唯物論哲学は、それ自体

としては単なる仮説であって、その正当性は歴史現象や社会現象を実証的に検討することによって証明されねばならない。そして、『唯物史観』のカウツキーが随所で論じているように、この命題は、精神の能動的な作用を説明していない点で、最早、実証的には維持できないのである。カウツキーによれば、「精神は、生存競争における動物有機体の道具の一つである。その機能は、動物有機体を、自分を取り巻く環境に正しく対応させ、個体と種族の保存という最終目的に対して合目的に行動させることにある。……精神は、環境の観察や環境のなかでの活動を通して、自己の欲望と能力を認識し、自我と世界との対立を、両者の順応のうちに解決しようとするのである。」(第1部第5編)カウツキーにとって、人間精神は、この引用にある動物有機体の精神の特殊な形態をなすにすぎず、発展を能動的に導く決定的な契機だったのである。「社会を発展させるのは究極的には精神である。精神は、それ自身が自己の反措定を作りだし、ついで、措定と反措定とのあいだに総合を求め、それを発見した後は、その総合から新しい反措定を形成する等々の過程をとって社会を進展させるのである。」(第3部第3編)

このように、形而上学としてのマルクスの唯物論は、カウツキーにとっては支持しがたいものであった。そこで残るのは、科学方法論としての唯物論である。「科学的方法としてのマルクスの唯物論は、第一に、事実を原理によって律するのではなくて、原理が事実によって、経験によって検証されるべきと捉えるものである。……第二に、事物を不変・不動の本質として把握するのではなくて、その運動と変化において、生成と消滅において、その全体的な連関において把握するものである。」(第1部第2編)

ここに示された科学的方法は、平凡なマクロ動学的発展法則論のそれであり、当時においてもありふれた主張にすぎない。したがってカウツキーにおいても、ことさらマルクス主義と結びつくものではない。いわば、純粋に科学的な方法として、あらゆる世界観とも結びつくことのできるものであった。(第1部第2編)カウツキーにとっては、第1に、これが、エンゲルスと第2インター期マルクス主義が自称した科学的社会主義の科学性を救い出す道であった。この点ではマルクス主義に対する正統性信仰がカウツキーに残っているのである。しかし第2に、マルクス主義の既存のドグマから解放されて、事物を虚心坦懐に眺めるための出発点でもあった。こうした出発点として見る限りでは、カウツキーの方法的な主張の平凡さは、むしろ、学問の確実な基盤に立ち戻って事物とマルクス主義を再検討するという方向に相応しいものと評価することもできる。

第2項 弁証法

発展法則を事実によって、経験によって検証するという立場から導かれたのが、マルクスとエンゲルスの弁証法のヘーゲル主義的残滓に対する批判である。

カウツキーにとっては、新ラマルクス主義の立場から、人類史を含む自然史を貫く発展法則を捉えようとしたときに見えるのは、発展は、有機体とその外部にある環境との対立を、有機体が克服する過程として現れるということであった。環境は、有機体にとっては、その個体および種としての生存

に必要な資料を提供してくれる生存基盤であると同時に、その生存を脅かすものである。しかも、個体や種の働きかけがあらうとなかろうと、不断の変化にさらされるものである。個体と種は、そのなかで自己保存を行おうとすれば、何らかの形で、変化する環境に適応せざるをえないし、適応に成功した個体や種のみが自己保存を行うことができる。(第1部第5編)

そこで異なるのは、適応の様式である。植物種の場合には、受動的適応のみが生じる。「気候、土壌などの環境変化が、植物の栄養状態を変化させ、それによって有機体の変化が、合目的であれ非合目的であれ引き起こされる。有機体の変化が合目的な場合には、環境の変化に適応した新種が形成される。」(第4部第9編)動物種の場合には、意志・認識能力・運動能力が発達しているので、受動的適応に能動的適応が加わる。人類の場合には、知性と行動能力の故に、人工的器官(=人間的諸関係、社会制度、社会、国家)の創造による新しい諸関係への適応という第3の意識的適応が加わる。

(第3部第3編)「この人工的器官は、人間に対して新しい環境の一要素となる。人間は、環境への適応に際して、自分自身を変えるだけでなく環境も変える。そして、人工的器官を含む変化した環境と人間との対立が、再び現れる。人間が、環境を完全に自覚的に統御することはできない。」(第4部第9編)

このようにカウツキーにとっては、発展は、措定としての有機体と、反措定としての環境とが対立し続けるという二元論的な構成に基づいて生じる。この対立は、新種の発生や新社会の発生によって一時的に和緩させられるが、対立の最終的な総合に至ることはない。しかも、こうした一時的な総合によって達成されたものは、種や社会の構造が前の段階の総合に比べて複雑になっているということにすぎない。「世界に目的なるものは存在せず、各々の有機体は、その維持と増殖に滞着する自分自身の目的を持つにすぎない。合目的性と完全性が有機体の発展系列に従って増加するというのではないし、より高度に複雑に組織されたものが、単純なものより合理的だということもない。」(第1部第5編)

一言でいえば、種と人類に共通するこのような環境への無限の適応過程が、カウツキーにとっての弁証法である。生物学者であれば、これを弁証法ではなく一種の進化論と呼ぶであろうが、これに対して、カウツキーによれば、マルクスとエンゲルスがヘーゲルから継承した弁証法は、自己運動としての弁証法である。措定と反措定は、二つの互いに異なったものではなくて、措定のうちにすでにそれ自体の否定が含まれている。またこの運動は、絶対精神が自己を開示する道程として世界の完成化への志向を含み、しかも、その絶対精神が、運動の端緒にすでに含まれているとされる点で、完成は端緒への復帰であった。カウツキーによれば、こうした自己運動としての弁証法は観念論の名残である。「人間社会の発展にあっては、外界に対して無意識的に順応するだけでなく、意識的にも順応する。この意識的な順応において、人間は新たな人工的器官を創造するのだが、こうした器官は、人間が意識しなかった新たな外界に転化する。それゆえ、人間社会の発展に、一定の目的に向かう自己運動を見ることはできない。……最終目的を認識することは、社会の発展において

も不可能である。社会主義の最終目的についても、それは人類の最終目的ではなくて、プロレタリアおよびプロレタリアの事柄を代表する人々が、今日考えている最終目的である。」(第3部第3編)したがって、「ヘーゲルの弁証法は、単純に転倒しても自然と社会に応用するには無理がある。唯物論的应用にあたっては、ヘーゲルの弁証法は、その行程をも変更されねばならないのである。」(第1部第5編)

このような批判は、批判の論拠に新ラマルク主義をおいている点では、当時の生物学の水準からしてもすでに古いものであり、素人の荒唐無稽な議論に属する。しかし、そこから導かれた結論は、資本主義の発展を捉える上でも重要である。というのも、このような弁証法観をとれば、資本主義の自己運動が必然的に資本主義の自己否定としての社会主義を生むといった理解、蓄積論に依拠した社会主義必然論は斥けられ、社会主義の可能性を新たに追究しなければならなくなるからである。

第3項 唯物史観の公式

周知のように『経済学批判』序言で提出された唯物史観の公式は、以下のような命題群から構成されている。

第1命題：人々は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志とは独立な諸関係を、彼らの物質的生産諸力のある一定の段階に照応する諸関係を取り結ぶ。

第2命題：この生産諸関係の総体は、社会の経済的機構を形成しており、これが現実の土台となって、その上に、法律的、政治的上部構造がそびえ立ち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。人間の意識がその存在を規定するのではなく、人間の社会的存在が、その意識を規定するのである。

第3命題：社会の物質的生産力は、その発展がある段階に達すると、既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からその桎梏へと転化する。このとき社会革命が始まる。

第4命題：一つの社会構成は、すべての生産諸力があるなかでもう発展の余地がないほどに発展しないうちは、けっして崩壊することはなく、新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化し終わるまでは、古いものに取って代わることはけっしてない。

第5命題：ブルジョア生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をも作り出す。だからこの社会構成をもって、人間社会の前史は終わりを告げるのである。

唯物史観の公式は、カウツキーにとっては、自然史の一特殊領域をなす人類史のなかで、人類が創造した人工的器官である社会制度の相互関係、そうした社会制度と人間の生存との対立を示したものであり、かれの唯物史観のなかでは、サ

ブ・セクションをなすにすぎない。ここでもカウツキーは、唯物論や弁証法を扱った場合と同様に、その名称を維持しながら内容を変えていくというマルクス主義正統化論的な議論を、以下のように進めていく。

1) 第1命題

カウツキーは、第1命題を、次の2点で補足している。第1に、カウツキーによれば、最大の物質的生産諸力は、自然の資料や諸力に関する人間の知識と、それを技術的に利用する人間の能力、一言でいえば自然科学的認識である。これは、人類という種が、環境適応の過程で発展させた最大の自己保存手段なのだから、こうした自然科学的認識の意義の強調は、カウツキーの立論にとっては、自然史と人類史とを媒介する結節点としての意義を持つことになる。(第1部第5編)そして、資本主義認識という点では、後に見るように、剰余価値生産における相対的剰余価値生産の意義を徹底的に強調するという立場に結びついていく。

第2に、この能力によって生み出された技術体系に相応するのが、生産諸関係ということになるが、カウツキーにとっては、生産諸関係を規定するのは、物質的生産諸力だけではなかった。所有制度も、生産諸関係を規定するのである。この所有制度も、生産諸力によって規定されると述べているが、それをことさらに取り出して見せたのは、これも後に見るように、経済に対する国家の自立性を強調する立場につながっていく。(第3部第4編)

2) 第2命題

第2命題に関しては、下部構造による上部構造の一方的な決定という見方を否定し、交互作用論の立場を表明している。(第3部第4編)

3) 第3命題

第3命題における生産諸関係あるいは所有諸関係と生産諸力との矛盾を、カウツキーは、所有諸関係と生産諸力との矛盾に解消している。カウツキーによれば、「所有諸関係と生産諸力との衝突は、実際には、生産諸力を所有している人間と、生産諸力を適用し生産する人間との衝突である。生産諸力の所有者と利用者が、生産者と生産物の享受者が同じ人間であれば、生産諸力と所有諸関係との衝突は生じない。」(第4部第9編)カウツキーは、このように述べて、生産諸力と生産諸関係の矛盾という問題の中心を、経済学の領域から、所有制度を実定的に制定する政治と国家の領域に移す。

カウツキーにとっては、資本主義が、経済的必然性において社会主義を準備することは、あり得ないのである。「資本蓄積が、一方では、資本の集中と集積を進めて社会主義の物質的基盤を準備するとともに、他方では、労働者の窮乏化傾向を促進して、階級闘争を先鋭化させる、といった革命論は古い。資本独占が生産様式の桎梏であり、生産手段の集中と労働の社会化は、資本主義の外皮と矛盾する一点に到達すると、マルクスが述べたとすれば、我々はこれ以上マルクスについていくことはできない。」(第4部第9編)

こうしてカウツキーは、第3命題を修正するとともに、自らがエルフルト綱領で示した立場を放棄する。

4) 第4命題

第4命題に対するカウツキーの批判も、この点に関わっている。彼によれば、「この命題は、ブルジョア革命の研究から得られたもので、封建社会がその没落期には、生産諸力を発展させる能力を持たず、逆にそれを阻害したというところから出ている。しかし産業資本主義は、それ以前とは全く違った搾取体系である。産業資本主義は、絶対的剰余価値の生産だけでなく、相対的剰余価値の生産によって、収穫を常に増加させることができるのであり、生産諸力の衰退を避けることができる。」(第4部第9編)

このように、カウツキーにとっては、資本主義の崩壊と社会主義の必然性を経済学的に問題にすることは、もはやできないのである。それに代わって、ますます強調されることになるのが、カウツキーが以前から重視していた国家行動である。資本主義国家のもとでの所有の民主化の進展に社会主義の可能性が期待されることになる。それゆえ、『唯物史観』における資本主義把握も、資本主義経済ではなくて資本主義国家に中心を置いて展開されることになる。

5) 第5命題

第5命題は、二つの部分からなる。一つは、ブルジョア生産諸関係が最後の敵対的社会関係であり、この関係の廃棄をもって人類の前史が終わるといふものである。カウツキーは、すでに見たように、プロレタリアートの最終目的も暫定的なものにすぎず、しかも人類の最終目的なるものがあるとすしても、それとプロレタリアートの最終目的との関連は不明であると考えていた。したがって、彼にとっては、前史の終わりという発想は、実証不可能な形而上学的命題にすぎず、意味を持たない。

もう一つは、物質的生産諸力が、敵対的关系を克服する物質的な力を準備するという命題である。カウツキーは、人間の精神的な能力こそが最大の物質的生産力であると述べて、資本主義を克服しようとする人間の社会的・国家的な構想力に期待を寄せている。(第4部第9編)

6) 小括

このように、カウツキーにおける資本主義の見方は、マルクスやエンゲルスとも、エルフルト綱領時代の自分自身の見方とも、大きく異なっている。その最大の特徴は、資本主義経済の発展が、その自己否定として社会主義を必然化するという経済主義的発想が消滅してしまったことである。経済に代わって、社会主義の可能性を与えるのは、人間精神である。彼は、人間精神の変革的な能力を実証するために、唯物史観を自然史にまで拡張した。生物としての人間の発展能力を究極的に支えるものとして、人類における脳の発達を進化論的に捉え、その脳髓の機能のなかに、環境適応手段として新社会を形成できるだけの力が埋め込まれていることを見ようとした。そして、ますます巨大化し、社会生活に大きな影響を与えつつある、資本主義国家の発展のなかに、人間精神のこの能力が発揮される場を見ようとしたのである。

第3節 資本主義的生産様式

カウツキーによれば、資本主義的生産様式は、これまでのすべての搾取様式と決定的に異なる。これまでの搾取様式においては、生産は、消費・享受にのみ奉仕するものであり、国家の支配者は、そのためにのみ搾取を強化しようとする。労働力の消尽がその経済的手段であり、生産物の消尽がその経済的目的である。その結果は破産であった。(第4部第7編)

それに対して資本主義的生産様式は、相対的剰余価値生産を発展のてこすることによって、労働の搾取率を上昇させながら実質賃金を増大させることができ、労働時間を短縮させながら生産を増加させることができる。「生産性源泉を食いつぶすのではなく、生産性上昇に基づいて搾取する、世界的に最初の体制なのである。それゆえに、ここで初めて、国家は、停滞と貧困のうちに墮落し、ついには略奪の欲望に燃えた野蛮人の力に屈するのではなく、常に完成に向かう萌芽を自らのうちに持つ可能性を得たのである。国家と社会は、これによって全く新しい時代に入ったのである。」(第4部第7編)

カウツキーにとっては、資本主義的生産様式は、生産力の発展に適合した生産様式であり、生産諸力と生産諸関係の矛盾によって崩壊することはない。むしろそれは、相対的剰余価値の生産→賃金財の実質価値の低下→大衆の実質所得の増加を旋回点として発展し続けるのである。

「資本主義は崩壊しない。状況の変化に対する資本主義の弾力性、適応能力は、資本主義の過敏さよりも強力である。資本主義は、戦争という試練にもうち勝ち、今日では、純粹に経済的に見る限り、以前よりも強固になっている。今日では、ヨーロッパの没落というベシズムが広まっているが、それは資本主義の中心がアメリカに移ったことを示しているのであって、資本主義の没落を示しているのではない。資本蓄積の進行が資本主義の墓掘り人を用意し、資本主義の危機がますます激しく全面的なものになっていくということを期待するのなら、社会主義の展望はない。問題は、資本主義が経済的に生命力を保持するとして、プロレタリアートが社会主義のためにいかに勝利できるのかということである。」(第4部第8編)

「産業資本が頂点を極めたのは、軍事的権力の展開によってではなく、以前の生産様式より安く生産し、したがって社会にとって経済的に有利だったからである。産業資本は、以前の非合理的な生産方式に比べて、経済的に合理的である。資本主義的搾取は、所有の経済的必然性に基づくものであり、その機能は、よりすぐれた経済制度によって余分なものとされるが、しかし、それを除去するのには、たんに軍事的な暴力を利用して、その国を経済的に著しく傷つけるだけである。資本を凌駕するような経済制度の条件が存在しないなら、たとえ暴力によって一時的に資本を排除することに成功しても、資本は再生するに違いない。資本主義的搾取が依拠する所有は、搾取者のみならず被搾取者にとっても、しばらくの間は経済的に必要なものである。」(第4部第7編)

こうしてカウツキーにとっては、資本主義は、生産様式として見れば、生産力の発展、大衆の生活条件の向上にとって、少なくとも、当面は必要な条件なのである。資本主義的生産様式の問題点は、具体的には、技術水準一定の場合には、絶対的剰余価値の生産による剰余価値生産の最大化を追求しな

ければならない、という点から派生するものであった。それが、生産性源泉としての労働者の労働力を枯渇させる傾向を、資本主義以前の搾取様式と同様に持つことで、労働者の貧困化や自由時間の喪失、生産性源泉の破壊による体制破産といった危険をもつことであった。(第4部第8編) こうした危険を避ける体制を目指すことが、社会主義の課題になる。

「社会主義の最終目的は、搾取と支配のくびきを投げ捨てることである。ところが資本主義的な搾取は、軍事的な暴力に依拠するものではなくて、生産手段の私的所有と大経営がもたらす経済的な優越性に依拠するものである。そこで問題は、社会全体の欲求を充足する大経営を保持し、経済的に重要な経営における資本家の機能を保持しながら、その所有を私的なものから公的なものに変え、経営の推進力を私的な利潤追求から社会的欲求の充足に変えることである。」(第4部第8編) ここでは、市場そのものについては、何も語られていない。剰余価値生産の最大化という資本家の機能を保持しつつ、大経営を社会的欲求の充足を目的とするなんらかの公法的な団体に転換することが主張されているだけである。このような経営の公法団体化が、上記の危険を避けるために必要な課題なのである。そして、この公法団体化を推進する上で決定的に重要なのが、資本主義がともなう民主主義国家であった。

第4節 民主主義国家

カウツキーにとっては、民主主義国家の成立が、絶対主義に対する産業資本の勝利の条件であった。これをカウツキーは、市民革命の問題として歴史的に扱っているだけで、産業資本の発展が、論理的に民主主義国家を必然化するのか否かについては語っていない。ただ、資本主義の生産様式が、その存続を暴力的な機構の存在にではなく経済的優位性に依存していること、したがって、源著期を除けば、非民主主義的な支配機構の存在を自己の生存条件とはしない、といわれているだけである。(第4部第7編) しかし行論においては、発達した資本主義が民主主義国家を有することは、当然の前提とされている。

その民主主義国家は、カウツキーにとっては、「国家のなかに、国家を支配し搾取る特権的な機構を認めない。国家の全構成員のために多くの法をもたらす。国家の創世以来初めて、近代民主主義は、すべての成人に達した構成員に完全な同権をもたらした。これによって近代民主主義国家は、以前の全国家から区別されるのである。」(第4部第7編) 資本主義の生産様式が、搾取様式でありながら、生産力を発展させ、それを大衆に還元する初めての生産様式であったのと同じく、民主主義国家は、支配様式ではあるが、「暴力に基づく身分の相違を止揚」して、大衆参加の道を開いた初めての国家なのである。(第4部第8編)

この国家は、確かに、階級を止揚していないし、階級闘争と階級支配が、そのもとで存続する。搾取階級が権力を掌握して、自己の階級利益のために権力を利用するのを妨げない。しかし、こうした搾取階級による国家機構の利用は、カウツキーにとっては、民主主義国家の本質になってはいない。「民主主義国家は、少数派の機関ではなく、多数派の機関であるように設立された。民主主義自体が、民主主義における巨大

な搾取者の政治的権力を無にする可能性を提供するのである。そうなればなるほど、民主主義国家は、搾取階級の単なる道具であることを止める。国家機構は、被搾取者を屈服させる道具から解放する道具へと変わり始める。」(第4部第8編)

このようにカウツキーにとっては、労働者階級の階級闘争がこの民主主義国家を基盤にして発展していけばいくほど、一方で、資本家階級がその経済的機能によって支配する経済と、他方で、労働者階級を代表する政党が影響力を増す国家との対抗という形で、社会は動いていく。(第4部第8編) そのなかで、より優位な力を発揮するのが、カウツキーにとっては国家である。「近代民主主義にあつては、産業発展とともに国家機構も拡大し、国家が社会生活の全体に影響を及ぼすようになる。国家の軍事的性格はしだいに後退し、経済的・文化的課題がますます重要となってくる。それとともに、被搾取階級の国家に対する関係も変化する。いまや、被搾取者たちも、国家を破壊したり解消しようなどとますます考えないようになってきている。むしろ、自分たちの役に立つように国家権力を強化しようと考えているのである。同時に、下層階級の希望のないあきらめも消え、彼らは、まず民主主義をめぐる闘いに、それから、国家により大きな影響力を行使すべく民主主義を利用する闘いに、乗り出している。」(第4部第7編)

国家の役割の増大のなかで、国家権力を利用しうる立場を得た労働者階級が、社会的欲求の充足という目的のために、経営の公法的規制を促進していくこと、これがカウツキーにとっては社会主義であり、その基盤を与えるのが民主主義国家の存在であった。

第5節 まとめ

以上で見てきたように、晩年のカウツキーの資本主義観は、下部構造決定論、社会主義の経済的必然性、生産諸力と生産諸関係の矛盾といった当時のマルクス主義の常識から大きく逸脱している。彼にとって資本主義は、生産諸力の発展に適合した生産様式であり、生産諸力の桎梏となって社会主義を準備するものではなかった。所有関係においてはともかく、生産関係としての資本主義を否定する必要もなく、それは社会主義にとっても、必要な前提であった(=機能としての資本家の必要性)。資本主義が社会主義を準備するとすれば、それは、民主主義国家の働きによるのである。民主主義国家が、経済を含む社会領域を支配してそこに民主主義を及ぼすのであり、労働者階級や労働者政党がそれを促進したり、実行したりすることで、社会主義が進行するのである。

逆説的にいえば、資本主義は、生産力を発展させる生産様式を確立し、社会主義を目指す体制内行動を可能にする民主主義を確立する点で、その正常な発展のうちに社会主義を準備するのである。この意味で、カウツキーにとっては、資本主義の民主主義国家の確立と発展こそが、人類史における最大・最高の画期となるのである。

(E-Mail to : huchda@hana.fujijoshi.ac.jp)